

## 小中連携による外国語教育・英語科研究

### 1 研究テーマ

外国語活動・英語科を見据えた小中学校間の連携の在り方について

### 2 研究の目的

平成 32 年度より完全実施となる外国語教育に向けた小中連携の在り方や教職員の指導力育成について、主に相互の授業公開を中心として研究協力校とともに研究を進め、明らかにする。

### 3 研究設定の背景

平成 32 年度より完全実施される次期学習指導要領では、小学校 3・4 年生で外国語活動、小学校 5・6 年生で外国語教育が新たにスタートをする。つまり今後は英語教育を小学校段階から系統的に進めることが求められる。

このような状況の中、これまでの小学校における外国語活動が積み上げてきた成果や課題を小中学校ではどのように感じているのか、また外国語教育を進めて行く上で今後どのような準備や連携体制の構築が必要なのだろうか、改めて現状から見つめ直す必要がある。

小中学校における英語教育の現状を整理し、英語科導入のねらいを現場の課題と重ねながら、今後小中学校間で教科の情報を共有しつつスムーズに接続していくにはどのような小中連携の在り方が考えられるのかについて、研究協力校の協力を得ながら検討を進めた。今後、小中学校 7 年間（小学 3 年～中学 3 年）の視点で英語教育を充実させていくことにつなげられたいと考えている。

### 4 研究の内容

#### (1) 小中学校における外国語教育の現状の整理と、及び今後に向けた情報の整理について

これまでの小学校外国語活動の取組ではどのような成果や課題が明らかになっているのかを過去の調査から見つめ直すとともに、研究協力校が感じている外国語教育の現状や小中連携の課題について聞き取る中で、現場の課題として見えてきたことを整理した。

#### ア 外国語教育にかかわる現状について ～平成 26 年度 小学校外国語活動実施状況調査の結果」報告より～

文科省が示しているこれまでの情報も含め、外国語教育が今どのような現状にあるのか、その実態について整理をして、これまでの外国語活動の成果と課題についても一度見つめなおした。

#### (ア) 英語に対する意識より

	小 5・6	中 1	中 2
「英語が好きですか」	70.9%	61.6%	50.3%
「英語の授業は好きですか」	72.3%	60.2%	

↓

英語の授業の中で楽しいと思うこと	小 5・6
「外国のことについて学ぶこと」	75.8%
「日本語と英語の違いを知ること」	71.4%
「英語で友だちと会話すること」	66.6%

小学生の英語への知的欲求は高く、中学校進学後も変わらず高い状況である。これは、小学校における外国語活動が、英語への意識面でのハードルを下げることに寄与していると考えられる。その一方で、学年が進むにつれて英語が好きと答える生徒の割合が減少している状況も見られる。

(イ) 将来の英語使用に対する意識より

	小5・6	中1
「英語が使えるようになりたいですか」	91.5%	89.4%

これから英語を使ってしてみたいこと	小5・6	中1
「海外旅行に行くこと」	84.4%	77.9%
「外国の人と友だちになること」	77.1%	68.9%
「外国の人と話すこと」	75.5%	69.1%

学んだ英語の活用について	中2
「授業で学習したことは将来社会に出たときに大変役に立つと思う」	87.1%
「将来英語を使って海外では是非働いてみたいと思う」	42.0%

子どもたちは、英語を使って友達をつくり、将来の自分の世界を広げたいと考えている。中学校でも減少幅はあるものの、いまだ高い割合で将来の自分を広げていきたいという考えを持っていることが分かる。

時代の流れや自己の将来を見据えて英語の力を習得する意義や必要性を児童生徒が感じている状況が見られる。

(ウ) 小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったことより

「小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと」	中1
「英単語を読むこと」	80.1%
「英単語を書くこと」	83.7%
「英語の文を読むこと」	79.8%
「英語の文を書くこと」	80.9%

いずれの項目も、小学校時代における「読む」「書く」も含めた言語活動への知的要求が非常に高まっているとも、中学1年の新たな英語という教科で苦しんでいるととれる状況が見られる。

児童生徒が小学校での外国語活動に親しめば親しむほど（英語への期待が膨らめば膨らむほど）、それまでの音声中心の活動から読み書きの活動への急激な移行に戸惑いが大きくなり、そのギャップに苦しんでいるのではないだろうか。

「聞く・話す」の音声を中心とした小学校での外国語活動における学びを、中学校英語の「読む・書く」活動にスムーズにつなげることが、今後より一層求められる結果である。

## イ 小学校・中学校現場からの声より

小学校での外国語活動の学びを中学校になめらかに接続できれば、中1ギャップの解消や英語の学力向上につながるはずである。ただ、これまでの小学校外国語活動では意欲の面では中学校につながられても、定着という視点ではつながりが弱いということが上記の調査結果からも推測される。

特に、前述(ウ)の調査結果では8割以上の生徒から小学校段階からの「読む」「書く」も含めた言語活動への要望があり、これは中学校英語へのなめらかな接続を実現するという点では無視できない視点である。

そこで研究協力校での中1導入時の英語指導の現状について、また小中連携にかかわる双方の認識について、研究協力校の教務主任及び教科担当教員からの聞き取りを行った。その中から、次の(ア)～(ウ)の3点が課題として見えてきた。

### (ア) 中学校英語スタート時点での生徒の現状について

上記の調査結果からも、小学校での外国語活動を通じて子どもたちは確かに英語に「親しみ」、英語への抵抗感を減らしてきている。また、小学校での音声中心の外国語活動を経験することで、「読み」「書き」にあこがれを持って中学校に進学してくる状況が生まれている。

ところが、小学校外国語活動の場合は、「定着」が第1の目的ではないため、また授業時数も限られていることもあり、小学校毎に指導内容のばらつきによる学校差が生じやすい。そのため、中学1年の英単語や文法を教えながら並行して小学校の復習(ローマ字を改めて定着させる指導、アルファベットの書き方の復習など)をする状況となり、一時に多くの内容を詰め込むことになっている。ただでさえ新しい教科で戸惑う状況なのに、苦手意識を持つ生徒には、なおさら抵抗感を引き出させてしまうこととなる。

### (イ) 小中連携を進めていく時間の確保や連携の核となる人材確保の困難さ

平成23年度に小学校に外国語活動が導入された際には、英語指導補助が配置され、T2としてのサポートを受けながらT1の小学校学級担任が英語の指導技術を徐々に向上させていくことで外国語活動のスムーズな導入が図られた。また小中連携加配が中学校の英語教員であった場合は小学校で外国語活動の支援をすることもあった。

しかし、その配置がない学校の場合は中学校教員が小学校に英語指導で出向く時間の余裕はなく、小中学校間で英語教育を取り上げて連携する機会はほぼないと考えられる。

小中連携推進のための人的配置があれば担当者を中心に連携は確実に進むが、現状はなかなかその人材を得られない状況にある。また、担当者を決めてしまうとその人材がいなくなった際には連携の道が途絶えてしまうことになる。

そのためにも、推進委員会を中心にして定期的に指導内容の系統性や指導技術等の情報を小中学校でそれぞれのノウハウを学び合う場を設定する等、「人」でつながるのではなく「組織」でつながる体制作りを進めていくことが重要であると考えます。

### (ウ) 小学校教員の英語指導技術の習得について

次期学習指導要領では教科としての小学校英語の中で「読む」「書く」の指導内容が導入され、中学校の学習内容の一部が小学校に回ってくるのではないかと危惧されていたが、基本的には中学校での指導内容の前倒しではなく、小学生の発達段階に合わせた簡単な文字の「読み」「書き」をする形で進められる。中1スタート時に行っているたくさんの指導の中のベース部分を、小学校段階で体験的に習得させる機会を作っておくことにより、前述のような中1スタート時のハードルをぐんと下げる狙いがある。

とはいえ、小学校教員には指導のノウハウはほぼない現状で、3年後には新しい教科と

して授業実践をしていくことになる。子ども達に確実に学ばせていくための小学校教員の英語指導技術の向上が早急に求められる状況にある。

## (2) 小中学校間における相互授業参観の実施～3つの視点を共有して～

次期学習指導要領でどのような内容を小学校で扱うことになるのかということ、実はまだその内容は明確には示されていない。ただ、現在先行実施している地域が使っている新たな補助教材(Hi!friendsplus)作成における3つの視点が明らかにされている。

- ①アルファベットの文字や単語などの認識
- ②日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き
- ③語順の違いなど文構造への気付き

この3つの視点を持って、小学6年の外国語活動、中学1年の英語授業を相互に参観し、今の研究協力校の現状の中で、「読む」「書く」の指導内容を効果的に中学校の言語活動に繋ぐことができる方策について情報交換を進めた。

### ア 小学校授業参観

日 時：平成28年11月17日（木）14:50～

場 所：亀岡小学校

公開学級：6年1～3組

内 容：Lesson5 「Let's go to Italy」

プロジェクターで色々な外国の様子を映し、担任がその国について紹介することで児童への興味付けを行い、キーマンゲームを通して、英会話を楽しんだ。



### イ 中学校授業参観

日 時：平成29年2月3日（金）14時20分～

場 所：亀岡中学校

公開学級：1年3・4組（少人数学級として3学級授業公開）

内 容：学校紹介の文章作成、関係代名詞のテスト、進行形（be動詞+ing）の導入

単語を覚える：繰り返し、スピードアップ、交互読み

何をしているところでしょうかクイズ…フラッシュカードのように

英文を読み合う（文章を見ながら）・・・フォニックスの場面

学力保障…50分授業の内、40分を授業で10分をサポート（厳しい子につく）

## (3) 小中教科担当者の合同検討会の開催

小中学校の校種間をつなぐ教職員間の情報交換の場を設定することにより、教職員間の連携を深め、中1ギャップの解消に繋がるような体制づくりについて話し合う場を持った。

2月3日の授業参観後には、児童生徒の実態を中心に据えながら3つの視点からみた今後の小中連携の在り方について意見交換を進めた。教員間が現状をベースに交流と連携を進めていくために、互いの意見を出し合う機会となった。

### ア 小学校英語教育に向けた協議会 8月2日（火）10:00～

#### (7) 亀岡小学校における英語教育の進捗状況について

- ・5、6年生は週1時間程度の外国語活動、3、4年生では総合的な学習の時間で学期に3～5時間程度の外国語活動を取り入れている。

- ・担任をT1として、できる限るClassroom Englishを使って学習を行う。
- ・ALT、英語サポーター等の人材を活用しながら、児童が楽しみながら活動が行える環境を整備する。
- ・校内研修を行い、Classroom Englishやチャンツ・ゲーム等のアクティビティ、英語の歌、ICT機器などの活用、授業の最初のウォーミングアップの方法、新しい教材（あるいはフラッシュカード）などを作成している。

開催日時：7月27日（水）15:00～16:30、8月24日（水）10:30～11:30

研修内容：外国語活動の今後への展望（英語教育推進教員より伝達講習）

アクティビティやClassroom Englishの紹介

授業で使えるフラッシュカードを作成

※1年生～6年生まで（教材研究と準備）

#### (イ) 小学校英語導入に向けた今後の展開について

- ・T2として中学校教員が実際に小学校の授業に入ってもらえるか検討
- ・授業研究会の開催
- ・事後研や研修会の開催。…互いの学習内容の共有や小中連携に必要なことを話し合う。

#### (ウ) 中学校英語科へのつなぎについて

- ・ALTの時数が年間8時間から年間5時間に減っていること、5年生への英語サポーターがなくなっていることもあり、人材を活用するという点では厳しい状況にある。
- ・人材を活用しながら、児童が楽しみながら外国語活動を行える環境を整備することが外国語活動においては有効であったため、中学校からの人的協力は得られないか。

### ア 中学校授業参観後事後交流会 2月3日（金）15:00～

#### (7) 中学1年の英語授業の様子について

- ・全く英語を書いていない状況で進学するのに、たった1年でここまで英語をきちっと読み書きできるようになっている。
- ・英語を読むときに、相手を見て読むのではなく、文章を見て読み合っている。音で会話するのではなく、文字を読み取って会話する指導を中学校でしている。

#### (イ) 新たに小学校で実施されると予想される3つの視点から意見交換

##### ①アルファベットの文字や単語などの認識について

- ・繰り返し単語を覚えさせるのは、自分なりの覚え方を見つけさせるねらいがある。
- ・現在でも中学校入学時にすでに個人差（ローマ字やそれを使用するアルファベットの正確な書きなど）が生まれている。今後、「書く」活動が小学校で導入されてくると、これまで以上に小学校段階で指導しきっているかどうか（やり切らせているかどうか）が問われてくるのではないか。

##### ②日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きについて

- ・小学校でフォニックスが導入されるのは中学校としてもありがたい。
- ・文字と言葉の関係（フォニックス）を分かって読んでいる子は文字を見て読んでいく。分からず読んでいく子は文字を見ずに先生の方を見て読んでいく。

##### ③語順の違いなど文構造への気付き ～意見交換せず～

## 5 研究の考察

### (1) 実践の核となる人材育成の必要性

小学校にとっては、新たな教科の導入である。現状でも日々多忙感が増す中、現場にとっては負担が増すことは明らかである。また英語教育推進委員が本市の英語教育を推進していく中心となって動くことになるが、その人員には限りがある。一人一人の教職員が意識をもって地力をつけながら実践を積み重ねてやっていくことになると考えられる。

そのためにも、教員が英語の指導力量を高める機会をしっかりと保障し、推進教員を中心に学ぶ場を定期的に設定するなど、組織として計画性をもって取り組むことが重要である。

### (2) 小中7年間の視点をもって指導することの大切さ

何のための小学校英語の導入なのかをしっかりと再確認したい。小学校英語の導入は、これまでの外国語活動の拡充でもなく中学校英語の一部前倒しでもない。なめらかに中学校英語に進んでいくための基礎体力作りをカリキュラムに沿って確実に行うことが小学校英語に求められていることである。

中学校につなげる、小学校からつながっているという「小中7年間で学ぶ」意識をここで再確認してスタートを切りたい。また、小学校でどのような基礎体力をつけ、中学校でどのようにそれを発展させていくのかを相互に確認しつつ、それぞれの発達段階で確実に学びを積み重ねていくことが大切である。今後とも小中一体となって英語の導入の準備を進められればと考える。

### (3) ノウハウを学び合う

例えばフォニックスの指導は、これまでの小学校外国語活動の中で「親しむ」程度に扱っており「理解させる」指導をするとすると小学校ではやり方が分からない。

一方、これまでより指導を行ってきている中学校教員はその方向や指導のノウハウを持っている。小学校の教師にとっては、本当に近い場所に学べる人がいることになる。

中学校英語指導は中学生の発達段階に併せて行われるため、その手法を小学校高学年にそのまま持ってこれないとしても、アドバイスを聞いた小学校教員が経験を活かし、児童の実態に合わせて改善を加えて指導することは可能である。またその授業を中学校教員が見ることで、中学校教員についても授業改善につながる新たな学びという形で還元することも考えられる。

そのためにも、英語という教科を柱にして小中が互いの実践から学びあえるような小中間の教職員の近い関係を構築することが非常に大切だと考える。

近日中により詳細な計画が国から示されるが、今後も相互協力の体制を構築しながら積極的に小中連携を進めていくことが重要である。

## 6 成果と課題

(1) 教科学習を進める視点で小中学校間で英語指導に向けた考え方を相互に出し合うことによって、小学校英語の指導内容のポイントや指導方法等の具体的な話題を共有し、これからの相互連携の道筋を作ることができた。

(2) 新設の教科ということで、今後も小中学校間の定期的な連携を取り、相互の指導内容や評価の在り方について密接に関連させて実施していく必要がある。